

博士論文

「女らしさ」が生成する場

フィリピン、マニラ首都圏の日本人向けカラオケパブの労働誌

(要約)

田川 夢乃

広島大学大学院国際協力研究科

2022年3月

本論の目的は、商業的性取引の労働現場における「女らしさ」を行うという生成的な過程を詳細に考察することで、性的物象化をめぐる規範的・倫理的議論が見過ごしてきた「女らしさ」の偶発的で遂行的な出来事（状況）としての側面を明らかにすることである。そのため、本論は、フィリピン、マニラ首都圏の日本人男性向けカラオケパブ（JKTV）の事例をとおして、「女らしく」振る舞うことを前提とする労働現場の実態を詳細に検討した。その結果、日常の何気ない行為をとおして身体に表出する「女らしさ」は、複数の権力が交差する結節点としての身体とともに可変的に生成し続けているということが明らかになった。

J. バトラーのジェンダー・パフォーマティヴィティの議論は、歴史的に構築された権力作用の上で行為が模倣・反復されることによってジェンダーが構築されるという点を焦点化した。これに対して本論は、複数の権力作用が個々の女性によってどのように経験されるかという点を焦点化するポストコロニアル・フェミニズムの議論を接続した。そうすることで、本論は、ジェンダー・パフォーマティヴィティの議論だけでは十分に捉えることのできなかった、ミクロな状況における権力作用の錯綜を前提とした生成的なジェンダーのありようを具体的な事例に則して明らかにするとともに、歴史的な権力構造の反復とは異なる可能性を提示しようと試みた。

本論の議論は、JKTV という労働現場におけるフィリピン人女性接客者（CCA: Customer Care Assistant）たちの日常的な実践に、著者自身が参与し観察するなかで生じた問題意識に基づいている。CCA たちは、美しく着飾り、綺麗に化粧を施し、時にいやらしく振る舞うことで日本人男性客を歓待し、収入を得ていた。他方、急進派フェミニズムに代表される性的物象化の議論では、女性が男性好みの「女らしい装い」をすることは、男性優位の社会構造への従属とみなされ、そうした構造を強化し、再生産するものとして批判されてきた。また近年では、そうした態度はポスト・フェミニズムとして、個人の成功のために男性優位の社会論理に従う女性として批判される。確かに、こうした批判は、女性の権利や平等の獲得を目指す運動において、男性と女性との非対称な権力関係に基づく女性への抑圧や暴力に抵抗するための大きな力となる。だが、これらの批判的見方に従って、CCA をはじめとするナイトワーカーたちを女性の連帯から排除したり、更生が必要な救済の対象としたりすることは、彼女たちの生きられた経験を取りこぼしてしまうことにつながるのではないだろうか。

そうしたこれまでの議論に対する疑問から、本論は日々「女らしさ」を生きる女性たちの身体実践を説明するための新たな理論的・方法論的枠組みを構築する必要があると考えた。そして、CCA が自らの「女らしさ」を演出し、また、男性客が彼女たちの「女らしさ」に誘惑されるという、実践的な側面に注目した。ここで「女らしさ (femininity)」とは、「[異性愛を前提とする] 帰属社会の規範や慣習に則して女性に適した、あるいは典型的であると考えられる特徴」という辞書的な意味を踏まえている。その上で、女性接客者による男性客向けナイトワークのサービス＝商品の根幹をなし、顧客を惹きつける最も重要な魅力の一つとして「女らしさ」を労働の文脈から捉えている。加えて、労働の過程において、「女らしさ」が、女性たち個人の行為というよりも、彼女たちと顧客との相互行為において間身体的に立ち現れる生成的側面に主眼を置く。意図的／非意図的、能動的／受動的といった行為のグラデーションのなかで生じる間身体的な「女らしさ」の身体実践を、パフォーマティブに生成変容する動的性格から検討することで、流動的で多義的な性的身体のアクチュアリティを掴むことを試みた。

とりわけ本論の議論は、労働現場の微細な事例をとおして、「女らしさ」(femininity) の物象化、中でも「女らしさ」の商品化への批判的見方に対する再検討を行なった。こうした取り組みの背景には、セックスワーク（商業的性取引）を「仕事」とみなすことへの批判に対する疑問がある。

これまで、セックスワークを「仕事」としてみることに対しては、大まかにいって、三つの立場から批判が行われてきた。それらは、(1) 売春は隷属と定義されるべきであって仕事ではないという批判、(2) 売春婦は性行為という「他愛もないこと」をしているに過ぎず (only doing what comes naturally)、それを「仕事をしている」とみなすことはできないという批判、(3) セクシュアリティは個人から切り離

することができないため、性を売るとは根本的に自己を切り売りすることを含んでいると批判、というものである。これらの批判は、端的に言えば、性行為は自己の本質的な部分に関わるものであり、愛情で結ばれた親密な関係において行うものであるから、金銭やなんらかの見返りを求めて売買すべきものではないという前提を共有する。他方、これらの見方に対しては、セックスワークを感情労働として検討することで、専門的な技能を必要とし、感情管理によって専門的なサービスを提供する主体的な労働者であると批判する主張もある。また、顧客とセックスワーカーの関係に注目することで、金銭を介していても親密な関係が醸成されることを明らかにした研究もある。しかしながら、これら、セックスワークを「仕事」と捉え、その内実を明らかにした研究は、「セックスワークは仕事ではない」という批判に抗することを前提とするあまり、セックスワークにおけるパフォーマンスが性的物象化と切り離せない点については言及を避ける傾向にある。

自らの身体資本を高め、顧客に働きかける必要のある「ボディ・ワーク」としてのセックスワークでは、確かに顧客と親密な関係を築き、顧客が快楽や悦楽を十分感じることのできるような技巧や専門知識がサービス提供者としてのセックスワーカーを価値づける。他方、ルッキズムが浸透した商業的性取引の現場では、多くの場合、顧客と相互行為を開始するためには、ワーカーの見た目の印象によって顧客に選択される必要がある。つまり、セックスワークや接待飲食業などのナイトワークでは、ワーカーと顧客のインタラクションは、多くの場合、顧客からの性的物象化のまなざしがなければ始まらないのだ。このことから、セックスワークの労働の内実を明らかにするためには、性的物象化批判と距離を置くのではなく、道徳的善悪二元論に基づく性的物象化の議論を批判的に再検討することで、仕事としての性的物象化を捉え直す必要があると考えられる。

そこで本論は、主に急進派フェミニズムにおける性的物象化の議論を再検討した上で、性的交渉の具体的な場において性的物象化がいかに行われるかに着目する相互行為論的かつパフォーマティブな視点から、他者から性を客体化され、自らも客体化する女性たちの経験を詳細に考察した。本論では、性的物象化を相互行為のなかで間身体的に生じるものと捉える。その上で、性的物象化を労働過程で捉えることで、性的物象化、なかでも特に「性の商品化」によって生み出される非物質的な商品の内実を議論する。本論はバトラーのジェンダー・パフォーマティヴィティの議論を援用し、そこにタディアルによるポストコロニアル・フェミニズムの視点を接続することで、性的交渉の具体的な場において性的物象化が実際にどのように行われているのかに着目してきた。とりわけ、パフォーマティブな視点をとることで、性的物象化し物象化される「主体」ではなく、性的物象化の「行為」それ自体を論じることを試みた。

まず第一章では、「フィリピン人女性」の性的物象化をめぐる歴史性を検討するために、フィリピンにおける外国人向けエンターテイメント産業（セックスワーク）の歴史を整理した。タディアルによれば、グローバル資本主義経済のネットワークのなかに組み込まれたフィリピンは、「先進国」との非対称な権力関係において「女性化」(feminized)され「商品化」(commoditized)されてきた。フィリピン人女性労働者は、そうした国家の「女性化」「商品化」を象徴するとともに、具体化してきた。本章では、フィリピンにおける外国人向けエンターテイメント産業の変遷を辿ることで、「フィリピン人女性エンターテイナー」に与えられるイメージや商品価値がどのように構築されてきたのかを検討した。フィリピンのJKTVで行われる「女らしさ」のパフォーマンスは、第二次世界大戦以降の外国人向けエンターテイメント産業の勃興とともに構築されてきたといえる。在比米軍向けの「休息と娯楽産業」が整備されたことで、フィリピンはタイと並んで東南アジアにおける一大セックス観光地のひとつとされるようになった。そのようなフィリピンの赤線地帯が深く関係するようになったことには、マルコス政権期における観光開発と出稼ぎ労働推進政策に主な要因がある。1980年代以降の日本の高度経済成長にともなう「売春ツアー」ブームと、1990年代以降の「ジャパゆきさん」と呼ばれる日本への興業ビザでの出稼ぎ女性労働者の爆発的増加が起点となることで、フィリピンへの買春観光における「エキゾチック」で「オリエンタル」なフィリピン人女性のイメージと、日本社会における「ジャパゆきさん」としてのフィリピン人女性のイメージが、現在に至るまでの日本人男性客とCCAの関係性に大きな影響を与えてきた。

そのようなイメージはJKTVにおける「フィリピン人女性CCA」のパフォーマンスを構築するために

も利用されてきた。第2章、3章では、JKTVにおける「女らしさ」を行うことのパフォーマティブな生成的側面を検討する前の舞台設定として志向的なパフォーマンス (intentional performance) に注目して議論した。まず第2章では、パフォーマンスを行う舞台となる JKTV を取り巻く地理的空間配置に着目した。とりわけ本論の調査対象である X店が顧客にとって「非日常空間」として立ち現れる大きな要因となっている「あやしき」のイメージをめぐって、そうしたイメージがどのように形成されているのかを日本のフィリピンパブとの連続性と、実際の店内の空間配置から説明した。

続く第3章は、CCA による志向的なパフォーマンスの側面に焦点を絞った。JKTV という商業的性取引の空間では、「女らしさ」や「ふしだらさ」がサービスに付加価値を与えるものとして強調され、意図的に演じられ、表現されている。本章では、JKTV 経営者や顧客によって期待されるパフォーマンスを、CCA がどのように内在化し意図的に演じるのかという点を検討した。ここでは特に、店のルールに注目することで経営者による CCA の規律訓練がどのように行われているのかを説明した。そして、そうした規律訓練を受けながらも、実際の接客場面においてはマニュアル化された教授的な学習ではなく先輩 CCA や人気のある CCA のパフォーマンスを模倣するような学習によってパフォーマンスが形成されていることを指摘した。JKTV の経営者はそうしたイメージを利用して店内空間という舞台装置をつくりあげ、顧客が期待するイメージ上の「フィリピン女性」に適するパフォーマンスを行うために、CCA を規律訓練する。CCA は罰金を課されることで店のルールに従うようになり、ポイント制の加算方式の給料によって顧客獲得競争に駆り立てられ、顧客が期待する「女らしさ」や「ふしだらさ」を演じるようになる。他方、実際の接客場面では、規律権力が直接介入するような教授的な学習ではなく、先輩 CCA や人気のある CCA のパフォーマンスの模倣学習によってパフォーマンスが形成されていた。

同時に、CCA の「女らしさ」のパフォーマンスは、そのような意識的で意図的な行為のみから形成されているのではなかった。むしろ、日常的に彼女たちの「女らしさ」を生成しているのは、接客場面における顧客との相互行為のなかで非意図的かつ偶発的に立ち現れるパフォーマティブな状況であった。そこで、第4章、第5章では CCA の「女らしさ」の労働を顧客との相互行為におけるパフォーマティブで偶発的な側面から説明するために、具体的な事例を検討した。第4章では JKTV における感情労働的側面を焦点化した。他のナイトワークと同様 JKTV でも、接客サービスの基本は感情をコントロールすることで顧客に肯定的な感情を生起させることである。男女間の性愛的関係が暗黙の前提とされる男性向けナイトワークの現場では、とりわけ「疑似恋愛」というプレイが接客サービスの根幹をなす。ここでは CCA と顧客との親しみを帯びた関係性に注目し、「疑似恋愛」が行われるなかで偶発的に生起する、感情管理を超えた「本当の感情」が、CCA と顧客との親密性を醸成するとともに顧客を惹きつける商品的価値を生成していることを論じた。

第5章では、CCA と顧客との間における「管理されない感情」ともいえる、親密性や愛情の「本物らしさ」の生成を、接客場面の相互行為における非言語的で身体的なコミュニケーションに注目して検討した。上記のように、パフォーマティブな行為は行為者の意図とは関係なく立ち現れる事象・状況を指す。X店では日本語で日常会話が可能な CCA は限られており、対する日本人男性客もタガログ語を話すことができるのは在比歴の長い自営業者や退職後移住者に限られる。両者の共通語である英語での会話も、細かいニュアンスまで伝えられるほどの複雑な会話は困難である場合が多い。このように言語によるコミュニケーションが困難な状況では、ジェスチャーやアイコンタクト、身体接触、声(音)などを用いた非言語的なコミュニケーションが頻繁に生じる。本章では、言語による意図の共有が行われない状況において、非言語的なコミュニケーションが行為者の意図しないところで偶発的でパフォーマティブなアクチュアリティを形成する過程を明らかにした。

しかしながら、接客場面の偶発的で相互生成的な側面は、CCA に対する暴力的な結果を招く恐れがある。第6章では、転じて、そうした「管理されない感情」や「本物らしさ」への欲望が、CCA に対する暴力的な結果を招く場面を考察する。男女間の性愛関係がプレイとして前提とされるなかで「管理されない感情」、「本物らしさ」が価値づけられることは、単に CCA がより多くの顧客を得て、より良い生を営むための力となり、男性支配の社会構造をうまく乗りこなすための抵抗の源となるわけではない。CCA

は顧客によって言語的な齟齬を利用され、時に理不尽に性的搾取されることもある。それは他者とのコミュニケーションの過程にある状況であるからこそ、制御できない不確実な状況なのだといえる。本章には、こうしたジェンダー暴力の事例をとおして、アイデンティティやセルフに「女らしさ」を還元することへの危惧を示すという狙いがあった。

これらの具体的な事例を用いて検討してきた結果から、終章では、本論を整理したうえで、序論で提示した疑問点に改めて立ち返り、本論の意義と独自性を示した。本論のこれまでの内容からは、日常の何気ない行為をとおして身体に表出する「女らしさ」が、複数の権力が交差する結節点としての身体とともに可変的に生成し続けているということが明らかになった。歴史的に構築された権力作用の上で行為が模倣・反復されることによってジェンダーが構築されるというジェンダー・パフォーマティヴィティの議論に対して、本論は、ポストコロニアル・フェミニズムの議論を接続した。この視点は、性の客体化が行われる状況で、ポストコロニアルかつネオリベラルな権力関係が個々の女性の身体にいかにか表象され具体化されるかということを検討するものである。ポストコロニアル・フェミニズムの議論を援用することで、本論は、ジェンダー・パフォーマティヴィティの議論だけでは十分に捉えることのできなかつたマイクロな状況におけるジェンダーの生成のありよう、つまり、位相の異なる複数の権力が錯綜するなかでジェンダーが生成する状況を明らかにした。その上で、他者から客体化されるとともに自らを客体化する女性の経験が、抑圧的で固定的な男性優位の社会構造とは異なる関係性を再構築する契機となりうることを指摘した。

本論でみてきたように、「女らしさ」は一方向的に押し付けられるものでも、自主的に表現するものでもあるが、それだけでは表しきれない曖昧さと偶発性をもった可変的で生成的な概念である。そしてより重要な点として、「女らしさ」は他者がいなければ成立しない概念であるといえる。何が「女らしさ」であるのかは、それを見とめる他者がいなければ生じえないし、「らしさ」とは何かを参照する歴史性がなければ成立しない。「女らしさ」は一時的で過渡的な状況・状態なのであり、CCAたちが生きるために日々行っている「手段」であるといえる。

以上のように、本論は、「仕事」の文脈のなかでの日常的な実践を描き出すことで、マイクロな状況で生じる「女らしさ」の性的物象化において、位相の異なる複数の権力関係が作用していることを明らかにした。しかしながら、仕事の空間を離れた日常性における規範や権力関係のもとでのジェンダー規範や期待のありようの記述が不十分である。この点は今後の課題として取り組み、さらに重層的な記述を行うことで、より複雑かつ開かれたジェンダーのありようを考察していきたい。